

III. 提言

【北方領土教育・学習を加速化させる ICT コンテンツ作成の基本的な考え方】

- ① 北方領土に関する質の高い授業が行われるよう教師へ支援を行う
- ② 授業（準備を含む）において北方領土について扱うことができる時間が限られている点及び教師によって知識や経験が異なる点を踏まえて作成を行う
- ③ 授業から発展して、家庭においても、生徒が北方領土について学習できるようにする

上記の考え方を踏まえて、対象を明確にして ICT コンテンツを整備する。

なお、授業や授業準備などで既存の ICT コンテンツが有効活用されることも視野に入れつつ、必要な ICT コンテンツ作成を目指す。また、活用を促進するために、必要に応じて教育機関へ教材を提供している各種企業や団体との連携を図る。

提言 1

学校で北方領土問題を扱う際の「段階」（フェーズ）を整理して提示

- ・学校で北方領土問題を扱う際の「段階」（フェーズ）として、「認知・関心」「探究（議論）」「理解深化・自分ごと化」の段階・プロセスを整理して提示。
- ・「段階」（フェーズ）を提示することで、学校で「北方領土問題の存在を知ってもらうこと」がゴールではなく、その先に、北方領土問題の解決に向けて議論・意見交換する「探究」や「理解深化・自分ごと化」のフェーズがあることを理解してもらう。

→今回の調査でも聞かれた、「北方領土問題は扱いづらいテーマ、政治的テーマで難しい」といったイメージの背景には、学習において、「北方領土問題をどのように扱ったらよいのか分からない」という懸念があることが想定される。そのような懸念の払拭にも役立つことが期待される。

（北方領土問題を扱う際の「段階」（フェーズ））



前提：

- ・北方領土は、豊かな自然に恵まれた我が国固有の領土である。

認知・関心 ～北方領土・北方領土問題への関心～

- ・北方領土・北方領土問題について、認知してもらうことに加えて、基礎的な内容を理解してもらい、さらに関心を持ってもらう。
（主に教科書を通じて、北方領土・北方領土問題の認知は図られている）

探究（議論） ～北方領土問題の解決に向けて～

- ・学校・クラス内での議論等を通じて、北方領土問題の解決策を探究・議論していく。
→グループ・チーム間などでの議論を通じて、北方領土問題に対する理解を促すことができる。

理解深化・自分ごと化 ～北方領土への持続的なまなざし～

- ・北方領土問題の解決に向け、学校内・クラス内の議論にとどまらず、外部との議論・意見交換・意見聴取（インタビュー等）を通じて、北方領土問題に対する理解の深化と自分ごと化を図る。
→例）ICT 機器を活用した元島民の講義・インタビュー、北方領土問題に取り組む生徒（例：根室高校「北方領土根室研究同好会」）、北方領土隣接地域の漁業関係者等との意見交換などを想定
→理解深化・自分ごと化によって、授業から発展して北方領土問題へ継続的に関心を持つ意識の醸成が図られる。（＝北方領土へのまなざしを持ち続けることにつながる）

提言 2

北方領土問題を扱う際の「段階」（フェーズ）に合わせた ICT コンテンツを開発

- ・北方領土問題を扱う際の「段階」（フェーズ）に沿った対象層、必要なコンテンツ、ツール・システムを検討。単にコンテンツで分けない工夫を行う。
- ・既存のコンテンツの活用、必要に応じて加工を行うこととし、特に必要とされる場合については新たに制作する。
- ・ICT コンテンツについては、専用 Web サイトに掲載・格納することを想定。

→例：（独）北方領土問題対策協会「北方領土学習教材集」

1. 認知・関心

(1) 対象層

北方領土問題を授業で学ぶ中学生・高校生全般

→特に、北方領土問題に興味を持つ生徒／授業を通じて興味を持った生徒

(2) 必要なコンテンツ

- ・認知・関心の「段階」において、必要なコンテンツは以下を想定。
- ・今回の調査でも聞かれた、「自分ごと化させることが難しい」という点を踏まえ、北方領土問題を「自分ごと化」させることにつながるコンテンツ等を用意する。
- ・この段階では、「北方領土問題の自然（動植物・水産資源等）」「元島民の体験談（講演記録・インタビュー記録）」を自分ごと化につながるコンテンツとして位置付ける。
→よりリアリティを感じてもらうために、「元島民の体験談」を活用することを考える。単なる手記に止まらず、動画・アニメーションなどを用いて、より関心を引き出す工夫も行う。
- ・身近な問題として見せる工夫、自分との関わりがあることとして見せる工夫を行う。

コンテンツ例)

- 北方領土問題の歴史的な背景
- 北方領土問題の自然（動植物・水産資源等）※
- 北方領土の地理
- 北方領土の産業、文化
- 元島民の体験談（講演記録・インタビュー記録）※
- 戦前の北方領土の様子
- 現在の北方領土の状況・様子

※北方領土問題を「自分ごと化」させることにつながるコンテンツとして想定

(3) ツール・システム

①教育コンテンツの活用目的に適したツールの採用～数分程度の動画クリップを用意～

- ・コンテンツは、端的に内容が理解でき、生徒の興味をひくことができる動画クリップを中心にワークシート、テキスト等、目的・テーマに合わせて適当なものを用意。特に、認知・理解の段階では、以下に挙げたように「動画クリップ」を用意することが必要。

数分程度※の動画クリップを用意。 ※2-3 分程度、最大でも 5 分

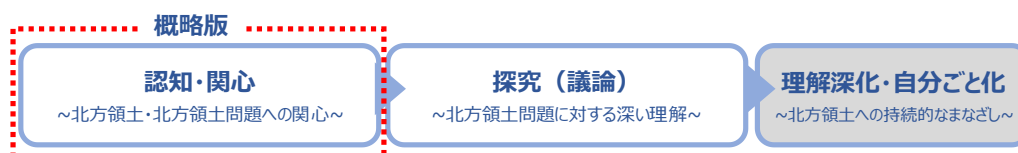
→中学校調査の「現在活用しているデジタル教材」として特に支持を集めていた NHK の学校向けコンテンツ「NHK for School」のように短い動画クリップは、2-3 分程度、最大でも 5 分程度

→より自分ごと化してもらうために、「元島民の体験談」を活用することを考える。単なる手記に止まらず、動画・アニメーションなど、より関心を引き出す工夫を行う。

②教師が扱いやすいように配慮／「段階」（フェーズ）に沿った「ガイドライン」を用意～北方領土問題の概略・大枠を捉えられる「概略編」ガイドラインの作成～

- ・授業において、北方領土問題をどのようなテーマ・切り口で扱えばよいのかが分からない教師向けに、教育コンテンツを活用した授業の進め方を指南・解説する「ガイドライン」を用意する。

（「段階」（フェーズ）の方向性）



■北方領土問題の概略・大枠を捉えられる「概略編」ガイドラインの作成

- ・北方領土問題の基礎的な内容を理解してもらい、関心を持ってもらうため、北方領土・北方領土問題の授業「概略編」の進め方についてまとめたガイドラインを用意する。

<「概略編」内容イメージ>

- ・北方領土は元々どのような場所で、どのような経緯でロシアに不法に占拠され、現状はどうなのか、ということが端的に理解できるもの。

- ・既存のコンテンツである北方領土問題対策協会「北方領土学習教材集」の教材は、北方領土・北方領土問題に関する個別の詳細内容が中心となっており、北方領土問題の概略・大枠を捉えることが難しい。北方領土問題に対して興味・関心を持たせる「概略編」が必要。

→「概略編」では認知・関心フェーズのコンテンツを活用

- ・実際の授業の進め方を理解してもらうため、北方領土について授業経験が豊富な教師等が ICT コンテンツを活用して授業を進める「ガイダンスビデオ」（実践動画）をコンテンツとして制作する。

2. 探究（議論）

(1) 対象層

①北方領土教育・学習に意欲のある学校・教師

- ・以下に例示する事業に参加経験のある学校など、北方領土教育・学習に意欲のある学校・教師を対象層に設定。

例) 「北方領土青少年等現地視察事業」参加校、「北方領土授業の実践」実施校、「北方領土を目で見る運動」修学旅行等誘致事業参加校、「北方領土を考える」高校生弁論大会応募学校

- ・この層に対しては、「探究（議論）」「理解深化・自分ごと化」フェーズの ICT コンテンツを充実させ、北方領土教育・学習を更に深めることができるというイメージを訴求していく必要がある。

②より効果的な授業方法（教え方）を求める学校・教師

- ・「①北方領土教育・学習に意欲ある学校・教師」で掲げる対象層ではなく、特別に重点を置いた取組を行ってはいないが、北方領土問題について、より効果的な教え方があれば導入・活用したいという学校・教師を対象層に設定。

例) ICT 教育について研究熱心な学校、社会科の授業についてより効果的な教え方を研究している学校

(2) 必要なコンテンツ

- ・探究（議論）の段階において、必要なコンテンツは以下を想定。
- ・今回の調査でも聞かれた、「自分ごと化させることが難しい」という点を踏まえ、北方領土問題を「自分ごと化」させることにつながるコンテンツ等を用意する。
- ・探究（議論）段階では、「北方領土の未来（将来）の姿（自由な往来が可能になった際のメリット）」「日本とロシアの北方領土問題の捉え方・意識の違い（二項対立）」を自分ごと化につながるコンテンツとして位置付ける。

コンテンツ例)

- 返還要求運動の具体的内容
- 現在の日本の対応・取り組み・行動（政府の対応）
- これまでの日本の対応・取り組み・行動（政府の対応）
- ロシア側の見解
→報道等に基づき、これまで述べられている見解を列举する形で整理
- ロシア人の北方領土問題の捉え方・意識 ※
- 日本人の北方領土問題の捉え方・意識 ※
- 北方領土の姿（自由な往来が可能になった際のメリット） ※
→豊富な水産資源の活用、豊かな自然（動植物）との共生

※北方領土問題を「自分ごと化」させることにつながるコンテンツとして想定

(3) ツール・システム

①教育コンテンツの活用目的に適したツールの採用

- ・端的に内容が理解でき、生徒の興味をひくことができる動画クリップといったコンテンツを中心にワークシート、テキスト等、目的・テーマに合わせ、適当なものを用意。
- ・動画については事実をまとめたもののほか、必要に応じて、生徒の興味・関心をひくようなシミュレーション素材等を用いることを検討する。

例)

議論や意見交換を促す素材として位置付けるため、10～20 分程度の動画も用意。

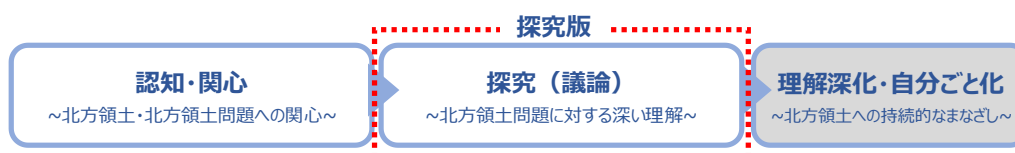
(シミュレーション素材案「北方領土の知られざる姿」)

- ・北方領土を観光などの目的で訪れた想定でのシミュレーション素材（地図や現在の四島の写真を用いたもの）を作成。本土では見ることの出来ない自然等を提示して生徒の興味・関心をひき、自由な往来が可能となった際の観光ルートや観光プランの立案等を通じた観光学習に資するもの。

②教師が扱いやすいように配慮／「段階」（フェーズ）に沿った「ガイドライン」を用意～北方領土問題に関する議論等を進める「探究編」ガイドラインの作成～

- ・「概略編」と同様に、探究フェーズに対応した「探究編」のガイドラインを用意する。

(段階（フェーズ）の方向性)



■北方領土問題に関する議論等を進める「探究編」ガイドラインの作成

- ・日露双方からどのような発言が行われているかなどについて学校・クラス内での議論等を通じて、解決策を探究・議論してもらうため、北方領土・北方領土問題の授業「探究編」の進め方についてまとめたガイドラインを用意する。

<「探究編」内容イメージ>

北方領土問題に対する理解を深める議論ができるもの。

- ・授業の効果的な進め方（コンテンツの活用）やどのようなテーマ・切り口で扱えばよいのか分からない教師向けに、ICT コンテンツを活用した北方領土問題に関する授業について解説するガイドラインを用意する。

→「探究編」では探究フェーズのコンテンツを活用

- ・実際の授業の進め方を理解してもらうため、北方領土について授業経験が豊富な教師等が ICT コンテンツを活用して授業を進める「ガイダンスビデオ」（実践動画）をコンテンツとして制作する。

→「探究編」では、実際の進め方、ICT コンテンツの活用方法、議論の誘発方法、授業のまとめ方等の解説を想定。

3. 理解深化・自分ごと化

(1) 対象層

①北方領土教育・学習に意欲のある学校・教師

- ・以下に例示する事業に参加経験のある学校など、北方領土教育・学習に意欲のある学校・教師を対象層に設定。

例) 「北方領土青少年等現地視察事業」参加校、「北方領土授業の実践」実施校、「北方領土を目で見る運動」修学旅行等誘致事業参加校、「北方領土を考える」高校生弁論大会応募学校

- ・この層に対しては、「理解深化・自分ごと化」フェーズの ICT コンテンツを充実させて、北方領土教育・学習を更に深めることができるというイメージを訴求していく必要がある。

②より効果的な授業方法（教え方）を求める学校・教師

- ・「①北方領土教育・学習に意欲のある学校・教師」に掲げる対象層ではなく、特別に重点を置いた取組を行ってはいないが、北方領土問題について、より効果的な教え方があれば導入・活用したいという学校・教師を対象層に設定。

例) ICT 教育について研究熱心な学校、社会科の授業について、より効果的な教え方を研究している学校

(2) 必要なコンテンツ

- ・理解深化・自分ごと化の「段階」において、必要なコンテンツは以下を想定。
- ・今回の調査でも聞かれた、「自分ごと化させることが難しい」という点を踏まえ、北方領土問題を「自分ごと化」させることにつながるコンテンツ等を用意する。
- ・この段階では、「元島民の体験談」「北方領土問題研究先進校の取り組み」や北方領土隣接地域やその周辺を生活・経済圏としている「漁業関係者の声」を自分ごと化につながるコンテンツとして位置付ける。

→よりリアリティを感じてもらうために、「元島民の体験談」は、ICT 機器やシステムを活用して実際に元島民から直接聴取する形を想定。

コンテンツ例)

- 元島民の体験談
→元島民から直接聴取（ICT 機器を活用した聴取等）
- 北方領土問題研究先進校の取り組み
→北方領土問題に取り組む生徒との意見交換（ICT 機器を活用した交流・意見交換）
例) 根室高校「北方領土根室研究同好会」、スピーチコンテスト入賞校等
- 漁業関係者の声
→北方領土隣接地域やその周辺を生活・経済圏としている漁業関係者の苦労や北方領土周辺の水産資源への期待等について聴取

(3) ツール・システム

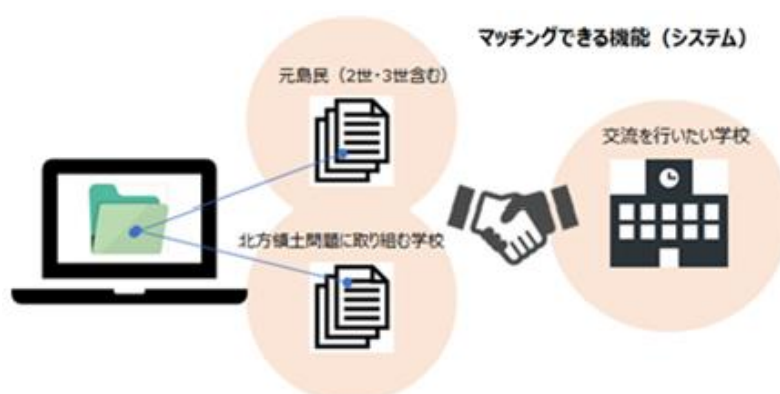
①教育コンテンツの活用目的に適したツールの採用

- ・認知・関心、探究フェーズとは異なり、理解深化・自分ごと化フェーズでは、動画等のコンテンツの提供という形ではなく、元島民の体験談や北方領土問題に取り組む同世代（生徒）の取り組み内容等、実際の活動（インタビュー等）を通じて聴取してもらうものが中心となる。

②「段階」（フェーズ）に沿った教育をサポートするシステムの整備

- ・北方領土問題を扱う際の段階（フェーズ）に沿った教育をサポートするシステムを整備する必要がある。
- ・特に「理解深化・自分ごと化」フェーズでは学校内・クラス内の議論にとどまらず、外部と意見交換・意見聴取（インタビュー等）が行える環境整備が必要になる。そのために ICT 機器を活用した意見交換システム（Web 会議システム）の他、交流を行いたい学校と元島民（2世・3世含む）、北方領土問題に取り組む学校＊をマッチングできる機能（システム）の整備が必要になる。

＊：根室高校「北方領土根室研究同好会」のようにクラブ活動として取り組む学校、北方領土問題スピーチコンテスト入賞校等を想定



4. その他

(1) 対象層

北方領土教育・学習で興味・関心を高め、意欲を持った生徒

- ・学校の授業で北方領土教育・学習に興味・関心を高め、意欲を持った生徒のための情報提供。家庭学習などでさらに北方領土について学びを深められるようにする。

(2) 必要なコンテンツ

基本的に「探究」「理解深化・自分ごと化」で整備するコンテンツに準拠する

(3) ツール・システム

スマートフォン対応のアプリとして提供する

→北方領土・北方領土問題を掲載する Web コンテンツにつなげるポータル、インデックスサイトとしての機能を中心に考える。必要に応じて、アプリ自体多彩なコンテンツや機能を搭載することを検討